

### 3. 2017 年度活動概要

今年度、授業学研究会（中部）は前半では、11月4日に開催された「第5回英語教育セミナー：授業学を生かす英語教育イノベーション II」（於：関西外国語大学中宮キャンパス）で発表する内容に関して討議した。特に近年 ICT、AI の発達などを受けて、英会話的な英語の必要性が疑問視されてきている事態を受け、大学に英語教育を改めて大局的に考える必要があった。様々な論点の可能性があったが、最終的にどんな時代になっても教育で必要とされる人間性の涵養が英語教育に求められるのではないか、という結論になり、その発表を代表である浅野先生にお願いをした。

浅野先生の教育セミナーの発表は「経済的成功に収れんする可能性が低い外国語教育」と題して、英語教育を経済的要因から切り離し、人間性涵養を目的することを提案した。

後半では、前半での議論、そして「教育セミナー」でのフロアの反応などを受け、さらに前半の議論を続けて行った。日本国内に限らず、語学教育の授業において、教室外の社会・文化の要素をどのように取り入れるかが重要であるかという点が浮き彫りになってきた。なぜなら学習者・大学生は教室内で完結しているわけではなく、彼らにとっては教室は大きな世界の一つであるからである。教員・教室がそこで完結していると考えて授業を行えば、学習者の修得内容に汎用性がなくなってしまう危険性がある。

以上のような議論を踏まえて、2018 年度は山住勝広『拡張する学校：協働学習の活動理論』（2017 年、東京大学出版会）をテキストとして、授業において何も普遍的なものと考え維持し、何に変化を与えていかなければならないか、考えていきたいということで本年度を終わった。